緊急発掘調査報告

姥懐遺跡・更科裏の山遺跡

中野市教育委員会

序　言

今回中野市東山住宅団地が造成されるにあたり、当該地区が姥懐遺跡として孝古学上貴重な存在であるため、緊急発掘調査を実施し記録保存することになつた。

この実施にあたつては長野県教育委員会社会教育課指導主事　林　茂　樹　先生のご指導のもと金井汲次氏をはじめ多数の調査員、調査協力員の方々のご尽力をいただいてその目的を達し、ここにその結果をまとめ報告できるはこびとなつた。

この間調査研究に当られた方々の非常なご努力、ご労苦に対し深甚な感謝をさゝげる次第である。本書は小冊子ではあるが、ここに盛られた内容は必ずや学界にも貢献するものであるを信じ、広く学究各位にお届けできることを喜びたい。

終りに重ねてご指導、ご援助いただいた各方面と直接調査にあたられた各位とに感謝して序言とする。

昭和四十四年二月一日

中野市教育長　土　屋　忠　男

一　総　説

(一) 調査の経過

戦中の食糧難時代に中野高等学校の手によつて比較的傾斜のなる部分約一、三ヘクタールが開墾され、三一年頃まで麦等の雑穀が栽培されていた。三二年には中野市の主産業になつたりんごの栽培試験を行うため市の果樹綜合指導地となり、ダイナマイトを使つて穴を掘り多くの品種のりんごが植えられた。しかし地盤が強粘土で生育が悪くその目的を達成することなく三八年には廃止された。

この年、中段の北寄りに中野警察署の射撃練習場が設置されることになりブルドーザが入つて約一五メートル四方の平坦地がつくられた。

四一年になつて、市街地に近距離であるところから住宅団地がつくられる事になり、四一年度から四五年度にわたつて姥懐地籍を中心に周囲約六万九千平方メートルを造成して公営住宅一一〇戸、分譲住宅一九〇戸計三〇〇戸が建設される事になつた。工事は予定どおり四一年から実施され、四三年度中には九〇戸が完成する。

傾斜地であるため宅地造成にはいくつかの段丘が造られるので切盛土が全域にわたつて、しかも大がかりに実施されるため現状は完全に移動してしまう。このため四一年の事業着手前に姥懐地籍内の遺跡状況を知る目的で緊急分布調査を実施した。

四二年に至つて、団地予定地内の入口に存する姥懐山古墳は、四二年度から三か年計画で施行される農免道路国庫補助による農林漁業用揮撥油税財源身替農道整備事業＝中野高校南側を起点に遺跡の西側↓更科↓中野プラスチック社南側の県道に接続する巾員六メートル、延長三、五一六メートルの道路工事の盛土用土取場として利用されることになつた。山全体が削り取られるため緊急分布調査を実施して遺跡状況の把握をはかつた。

四三年度に入つて姥懐地籍南側の更科裏の山遺跡地域が造成地として買収されたので分布調査を実施したところ遺物の検出をみたので、さらに緊急発掘調査を実施した。

以上発掘までの経過の概略を述べ、調査状況を次に列挙する。

1、姥懐遺跡分布調査

一、期日　四一年六月一九日、七月二日

二、場所　旧果樹綜合指導地内

三、調査者　県孝古学会（平岡小教諭）　田川幸生
　　市職員（元指導地作業者）　小根沢庄一
　　中野市更科　檀原長則
　　県孝古学会員（教委文化財担当）小野沢　捷

2、姥懐遺跡緊急発掘調査

一、期日　四一年七月一六日一七日二三日二四日

二、場所　姥懐内中野警察署旧射撃練習場

三、調査　責任者　中野市教育長　（故）　芳川　毅
　　指導者　日本孝古学協会員（高社中教頭）　金井汲次
　　調査員　県孝古学会員（平岡小教諭）　田川幸生
　　〃　（屋代高校教諭）　岡田正彦
　　〃　（教委文化財担当）　小野沢捷
　　中野市更科　檀原長則
　　教委事務局　北川昭一

調査協力　屋代高校地歴部、高社中学郷土クラブ

3、姥懐山古墳分布調査

一、期日　四二年一一月四日、五日、八日

二、調査者　日本孝古学協会員（高社中教頭）　金井汲次

県孝古学会員（平岡小教諭）　田川幸生

〃　（教委文化財担当）　小野沢捷

調査協力　日本地質学会員（高社中教諭）　中村二郎

教委事務局　北川昭一

〃　小野沢厳

高社中学郷土クラブ

4、更科裏の山遺跡分布調査

一、期日　四三年一〇月一三日

二、調査者　日本孝古学協会員（日野小教頭）　金井汲次

県孝古学会員（平岡小教諭）　田川幸生

〃　（更科）　檀原長則

調査協力　高社中学校教諭　関谷照雄

〃　高社中学郷土クラブ

5、更科裏の山遺跡緊急発掘調査

一、期日　四三年一〇月一日～七日、九日、一〇日

二、調査　責任者　教育長　土屋忠男

指導者　日本考古学協会員（日野小教頭）　金井汲次

調査員　教育次長（文化財担当）　小林曦暉

県考古学会員（平岡小教諭）　田川幸生

〃　（更科）　檀原長則

〃　（立正大学生）　金井正彦

〃　（教委事務局）　小野沢捷

教委　（社会教育係長）　中丸政範

〃　（社会教育係）　北川昭一

調査協力　日本地質学会員（高社中教諭）　中村二郎

高社中学校教諭　関谷照雄

南宮中学校教諭　永池稔

〃　山下叔男

飯山北高考古クラブ、高社中学郷土クラブ、

南宮中社会科クラブ　（小野沢捷）

(二) 姥懐遺跡周辺の地質

本地域の地質は、下位から別所層、玢岩、箱山溶岩類、崩壊堆積層に区分される。

1、別所層

模式地は中野市更科。熱変質作用をうけて灰色または暗灰色を示す珪質な頁岩である。板状に割れやすく、走向N20～30°E、傾斜15～20°NWで玢岩に接するところほど強い変質をうけている。

本地籍の別所層は姥懐遺跡地から更科、高遠にわたつて小分布するのみである。したがつて明らかな地質構造はつかめない。

2、玢岩

淡緑青色をおび、熱水変質したものは白色粘土化し、しばしば黄鉄鉱の結晶がみとめられる紫蘇輝石普通輝石玢岩である。模式的なものは中野市延徳付近に露出し、下高井、上高井地方の火山の基盤をなして広く分布している。この岩体の逆入時期については、別所グループ（一九五七年）によつて別所層（中新世）の堆積末期から青木層の時代と推定されている。

3、箱山溶岩類

夜間瀬橋直ぐ南の通称紫岩から箱山、更科峠にわたつて分布し、遺跡周辺においては、別所層ならびに玢岩を不整合におおう紫蘇輝石普通輝石安山岩である。最高嶺でも海抜六九五メートルの低い山であるが、岩体は崩壊、浸食をうけて山骨の露出が著しく、栗和田地域では、中野扇状地砂礫層によつて埋められ、山脚がヒトデ状をなしている。

4、崩壊堆積層

箱山火山体の南部西南斜面の末端に位置し、姥懐遺跡地ならびに、直ぐ北の東山団地にわたつて分布する。無層理の黄褐色泥土～泥質砂の中に角礫～亜角礫の箱山系の安山岩と珪質な別所層の頁岩を混える。

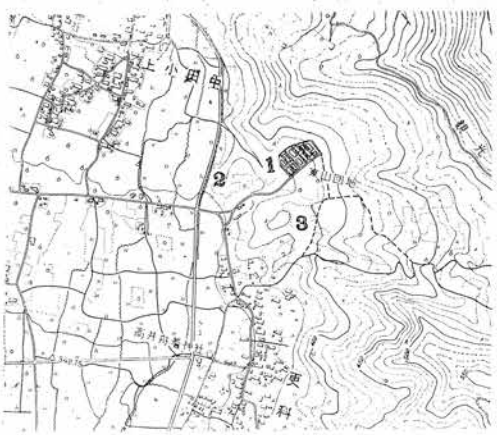
東山団地のおかれているところでは、有機炭質物の夾雑物を混え、また地形的にも明瞭な馬蹄形をなし、旧地すべり地形を呈している。

この崩壊堆積物は、末端において中野扇状地面によつて切断されているところから、中野扇状地面形成以前に堆積したものとおもわれる。

（中村二郎）

㈢ 遺跡をめぐる環境

中野扇状地の東側に嶺を連ねる箱山～更科峠の急傾斜の山麓には所々に鋸歯状の小さないくつかの扇状地形がつくられている。更科峠の真下にある当遺跡は、その名も示すがごとく、姥のあたたかい懐のように両袖状に山地がのびている。日溜りのよい所で、早春の梅の開花は中野市内では一番早いところである。海抜はおよそ三七八～三九五メートルのところで、中野扇状地扇央稍々下寄りに発達した小田中部落と、更科峠下の崖錐地帯に展開する更科部落に夾まれたところに立地している。



第1図　遺跡付近図（2万分の1）
1、姥懐遺跡　2、姥懐山古墳
3、更科裏の山遺跡

当遺跡付近には水もあるし、背面の山地は豊かな山の幸を求めることができ、すぐれた地立条件であることから、上古の人々の生活の舞台となり、墓域となつたもののごとくである。遺跡の立地するところの大部分は山林であつたが、次第に開墾され畑地となつたが、前述のように中野市の市有地となつてからは住宅団地造成の事業がすすめられ、現代風の住宅が年次計画によつて着々と建設されている。

周辺地域には数多くの遺跡が点在しているが、当遺跡のすぐ隣りあわせにあるものをあげると次のようなものがある。

更科遺跡―部落全面にわたるもので、縄文―早期撚系文、押型文、有尾式、上原式（多）礫器、石鏃、打石斧、磨石斧、石錐、石匙、石刃、石皿、磨石、凹石。土師―前期、後期坏、高坏、甕、その他破片等で、現在も地ならしや農耕の折に表採される例が多い。

普代遺跡―東北約一一〇〇メートルのところにあつて、普代部落の下寄りの地点である。縄文―上原式、下島式、佐野式、磨石斧、打石斧、石匙、弥生―栗林式（少）太形蛤刃石斧、土師―前期、後期（少）

小田中遺跡―部落の中央から東の水田地帯にかけて所在し、東限は姥懐山古墳直下まで、当遺跡とはもつともかかわりあいの深いものであろう。湧水にめぐまれ、早くから水稲耕作が行われたものと推定する。弥生―箱清水式、太形蛤刃石斧、土師―前期―壺、甕、長頸坩、盌、碗、その他破片。当遺跡から南方へ一八〇〇メートルには間山遺跡があつて縄文期から古代にわたる遺物の出土で知られ弥生後期の合口甕、銅鏃、古代の灰釉皿、管状土錘等は注目されている。それから西へ一二〇〇メートルの小さな山頂に金鎧山古墳があつて、合掌型石室と五鈴鏡、両刃鋸をはじめ多数の副葬品出土で著名である。

当遺跡に立つて目を西方へ向けると北から南へ長くのびた長丘、高丘丘陵がある。先土器、縄文、弥生、古墳期の埋蔵文化財の宝庫として知られている。学術的発掘調査が行われて、その結果をまとめて報告書を刊行したものが七件に及んでいる。（金井汲次）

二　姥懐遺跡緊急発掘調査

㈠　予備・分布調査

六月一九日予備調査。姥懐地籍の東部は耕作の機械化導入もあり、遺物は何等発見できなかつたが、北部から西部にむかう低地からは、土師器を主体に須恵器、黒曜石片数一〇点を採集することができた。特に土器片の分布の多いのは、中野警察署の使用していた射撃練習場附近であつた。

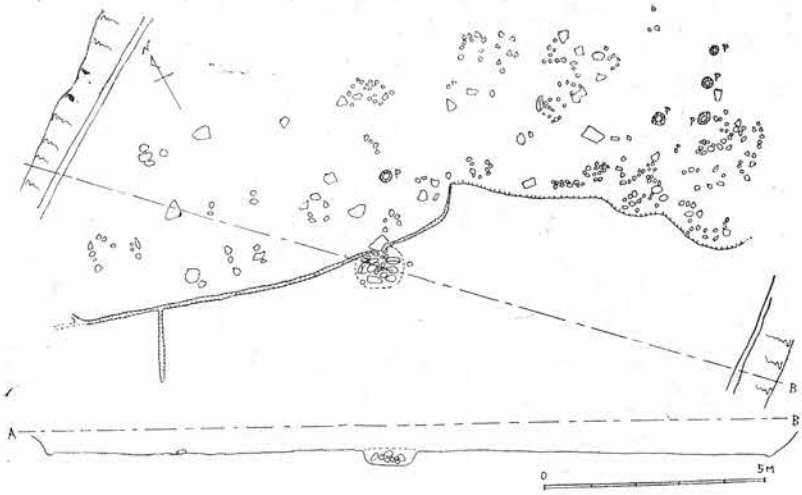
以上の予備調査の結果にもとずき七月二日再度の調査にあたつた

1、遺　構

射撃練習場跡は、中野市小田中姥懐一〇〇七と一〇九一―八の、中野市所有の畑地を地ならししたもので、北東から南西へ向かつてのゆるい斜面をなすところを、ブルトーザーにより、四方に向かつてかき上げられた、約三アールに及ぶ平地である。そのため、ここの北東部は遺跡が破壊されており、調査は不可能であつたが、中央部より南西部は、ほどよく露出しており、かえつて調査を容易にした。

まず最も保存状態のよいと思われる射撃場跡中央部を、ジョレンで一センチ程けずり取つた。すると明瞭に土質を異にする二つの地区に分割された。即ち東西に走る細い溝を中心に、北側に黒褐色の粘土質で大小の礫がみられ、また南側に黄褐色の粘土質の礫のほとんどない地区があらわれた。

細い溝は丁字形をしており、住居跡が北側に存在するかの如き様相を呈したので、特に北側黒土層の一部を調査してみると、大小の自然石の石組遺構がみられ、その付近からは木炭片にまじり骨片若



第2図　姥懐遺跡実測図

干の採集をした。

これらの事実は、今後更に発展する可能性が生じたので、ここでひとまず調査を打ち切り、本格的調査を待つことにした。

2、遺　物

この射撃練習場跡の遺構の一部の確認の段階において発見された遺物は、縄文式無文土器一片、土師器片二〇片、須恵器片五片、鉄滓二個、骨片、木炭片若干であるが、緊急発掘調査の項で総合的に述べる事にするが、わずかの地域から多数の資料を得たわけである

(二) 緊急発掘調査

1、調査経過

七月一七日(日)晴　分布調査のおり発見した東西に走る溝を追つたが、発展するきざしなく、そのため石組遺構を中心に掘り進める数個位ずつ集まる大小の自然石にまじり、土器片が出土するも、非常に小破片である。主体は土師器糸切皿で、灰釉陶器、須恵器等の破片も若干あつた。

七月二三日(土)晴　調査の範囲を東部に広げる。東部地区も黒褐色土質地区と、黄褐色土質の区別が明瞭である。西部地区に比較して、遺物の出土若干多い。ピット四個発見する、形、規模等ほとんど同一である。

七月二四日(日)晴　昨日調査した地点を更に掘り下げるも、午前中成果少なし。午後になり中央部の溝付近の長方形の平らな石附近を掘り下げたところ、地中から石積み墓址と推定される遺構を発見した。石積みは直経一メートルの円形上に、大小の円礫を積み礫間には、土師器、須恵器、灰釉陶器片がみられた。特に多いのは土師器である。午後七時三〇分夕やみせまり調査終了する。

2、遺構について

今回の発掘調査を通じて遺構を二つに大別される。それは黒褐色土地区を中心としたものと、黄褐色土質区を中心としたものである。

(1) 黒褐色土地区（第二図参照）

発掘地区の北側で、溝により仕切られている部分である。この土地特有の黒褐色粘土が堆積しているところである。特に注目するのは、大小の礫からなる石組み遺構である。

その一つは自然の小石を三～二〇個位を、無造作に配置させ、木炭片にまじり、土師器などの小破片が多量に散乱しているものである。石組を一つ一つけ分割するには多少の無理もあろうが、骨片の[1]出土や完形品のない土器、無数の木炭などの状態から、他地区の類例から庶民の集団墓址であろう。

無数の小石の配置に対し単独に配置された大形長方形で表面が平らなものがある。あたかも土台石に使用すれば好適と思われるものである。（第二図参照）

その外自然石の大きなものが遺構と無関係の如く配置されているが、今のところ墓地の境界を示す様子でもなく、礫の多いこの地帯に自然石もあつて何等不思議はない。

石組の遺構の外に、ピットが四ケ「形にほとんど六〇～七〇センチの等間隔に配列した形で発見された。直経はいずれも一五～二〇センチのもので、深さも一〇センチ前後の小さなものである。黒褐色土質にもかかわらず、ピット内は黄褐色の粘土がつまつており、人工的なことはたしかである。残念なことにピット附近は、ブルトーザによる、けずり取りがはげしく、しかも市街地からの塵芥の一

第3図 石積墓址

部が置かれたため、ピットとの関係は何物も把握することができなかつた事は残念なことである。

(2) 黄色褐色土地区（第二図参照）

前者の南側である。表土を人工的に黄褐色土で固められており、表面はほとんど何物もない。黒色土との境界にある溝の一部がこの地区へのびており、丁字形になつている。

調査の中心を前者に置いたため、調査の終盤になつてからの成果である。黒色土との接点に位置した長方形の平石附近を掘り下げたところ、大小一〇数個からなる礫を半円球形に重ねた、地中の石積みの遺構を発見した。底辺の直経は約一メートルに及び高さは四〇センチほどで、その礫間からは、土師器片を主に須恵器片や、灰釉陶器片を数片含んでいた。（第三図参照）

この石積みを取りのぞくと、約一、二メートルの円形プランの深さ一〇センチの凹みを見出すことができた。その内部のまわりを黄色の粘土で固めている。遺物として三片の土師器片と、わずかではあるが骨片を取り出すことができた。明らかにこれも墓制の一方法である。

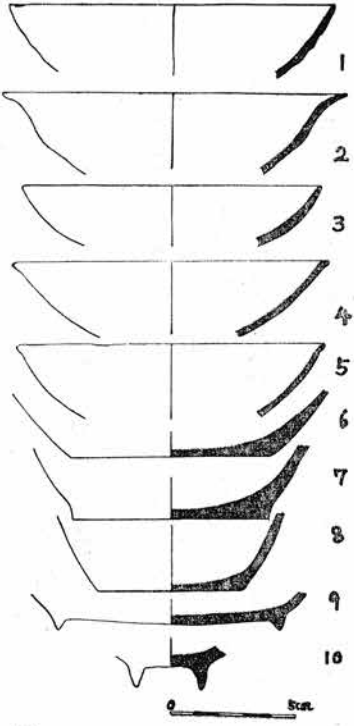
黒色土層の墓制とは石材使用については共通であるが他は全く異にした例として注目してよいであろう。しかし遺物の種類よりすればほとんど同一時代のものであろう。

3、遺物について

今回の出土物の主体をなすのは土器で、その外石器、鉄滓などである。

(1) 土　器

縄文式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器の四種あり、量的には土師器がほとんどで、他は一〇数点にすぎない。



第4図　土師器（1：3）

縄文式土器一〇数点の破片であるが無文のものが大部分で、縄目文を全面に付したもの四片発見された。無文のものも粗悪品であつたりして、明らかでないが縄文前期のものか、いずれも表面採集や土師器に混入して発見されている。

土師器大小の破片合わせて千点に達するが、器を完全に復元できるものは全くない。第四図の1～5はいずれも口縁部の復元図で大きさもほとんど同じく口経二〇センチ内外で精巧にできている。6～7までは底部であるが、7 8は系切皿である。今回の出土の底部の約百点に及ぶが、そのうち九〇パーセントは系切皿である。9～10は高台付底部である。

須恵器　一〇数点出土をみたが器形を知れるものは一点もない。

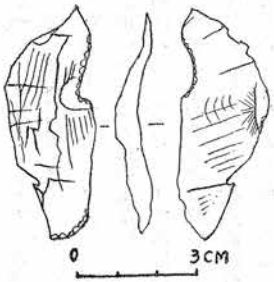
いずれも甕形土器の胴部砂片で、灰黒色の堅緻なもので畳目状文、格子目文、無文の三種が見られる。格子目文の内側には花形の青海波文様が付されている。この種のものは、黒色土地区からも積石墓の遺構からも数点出土した。

灰釉陶器　これも完全な器形のわかるものは一点もない。厚手のもの薄手のもの各種各様である。注目すべきことは、灰釉部分ひび焼き土器が二点発見されている。いずれも黒色土地区からの出土であるが、灰釉片の中でも美しさは別格である。おそらく灰釉片の出土は時代決定のかぎとなると思われる。[2]他地区の出土の例からして平安時代の中期を降るものと思われる。

(2)　石器及びその他の遺物

石鏃　黒色土地区から二点出土している。いずれも黒燿石製であるが、共に有柄部の一部が欠除しているが、片方の柄の短かい古式石鏃である。

ノッチ（第5図参照）一点ではあるが表面採集により得たものである。黒燿石製の弓なりになつた偏平な石器の彎曲した部分に、使用痕がみとめられる。これは縄文式のものであるか、先土器期のものかは出土状態が表面採集なので何とも言えない、しかしながら、付近の地形状態から先土器期との関連も考えられる。



第5図　石　器（1：2）

今後の調査を待つ。

その他　鉄滓が四点ほどみられるが、これと直接つながる関係品は見当らない。また骨片や木炭片も若干採集した。

（田川幸生）

註1　松本市並柳の室町時代の配石墓地の例小松虔氏の調査による。（一九六六年）安源寺「中世、近世墳墓群の調査」（一九六七年）

註2　桐原健「長野県中野市間山石動下遺跡調査予報」

三　姥懐山古墳緊急分布調査

田園都市である当市は農業構造改善事業を強力に推進し農業の近代化につとめてきた。

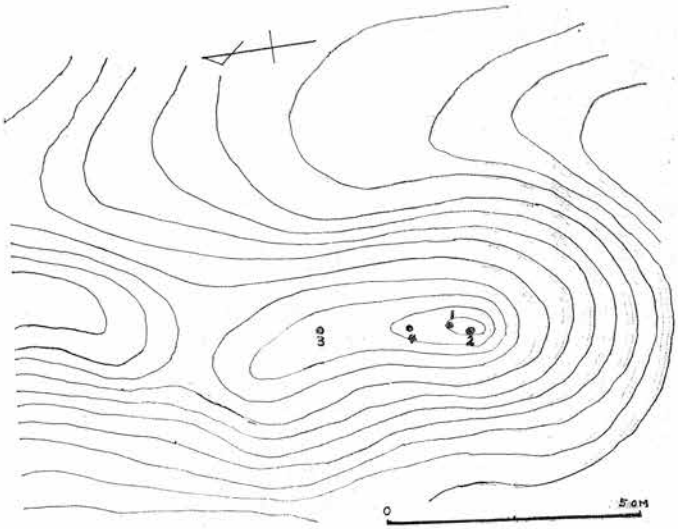
昭和四二年七月、国において採択された当市の農免道路は三か年計画で、延長三、五一六メートルの工事を実施することになつた。初年度は中野高校下から更科部落に至る九五七メートルで、その施行区域内に姥懐山古墳の所在地が含まれている。姥懐山古墳の出土品は県下でも注目される貴重なものである。そこで施工前に調査を実施したのである。

(一)　調査の経過

一一月四日（土）晴　午前伐木。午後調査を開始する。墳丘北斜面に小さなピットを入れ一号とする。一〇センチずつに念入りに掘り下げ、四〇センチに及んだが、褐色の頁岩小片六点を得たのみであつた。

一一月五日（日）曇　午前九時調査開始。

昨日に続き一号を更に掘りくぼめ、三〇センチで地山に達した。一見墳丘状に見えるが地山も小円丘状になつており、古墳築造の跡



第6図　姥懐山古墳分布調査図
2は遺物出土地点

は全然見られなかつた。

午後、遺物発見者である檀原氏が見えて、発見地点の教示を受け、第二号ピットを設けて調査する。土層は相当攪乱されていた。

本遺跡は、図上で見ても、また遠くから眺めても一見前方後円墳を思わせるものがあるので、小円丘から北へ二三メートルのところへ第三ピットを設けて調査した。地表下一〇センチ余で地山（褐色粘土）に達し、地表下二〇センチを掘つて止める。

一一月八日（水）晴　午後より調査開始。第一号の北八メートルの地点に四号ピットを設定。鞍部状の場所のため表土は流されて七八センチで地山に達した。地山は褐色の強粘質土で、二〇センチ掘りくぼめたが変化がないので作業を中止した。

以上三日に亘る調査を実施したが墳丘築造の跡は見られなかつた。先般出土した遺物は小円丘の西端であることと、極めて浅い所に置かれていたこと等を思いあわせて、調査員の見解としては、何等かの祭祀遺跡ではあるまいかということであつた。

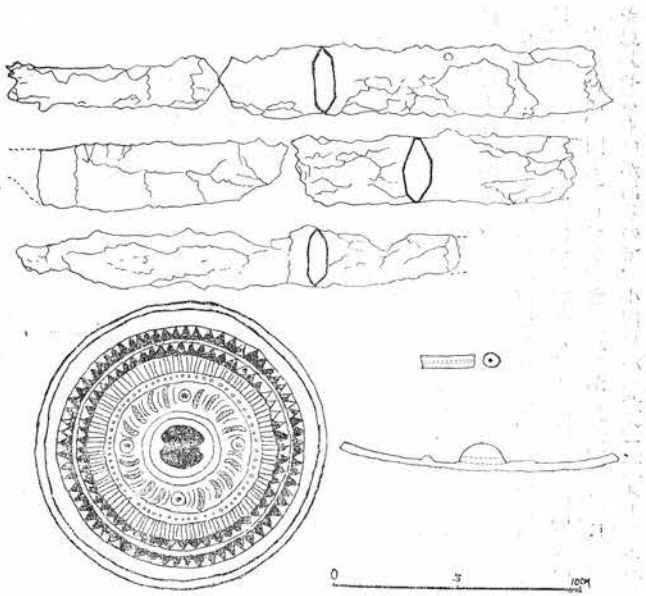
(二)　既出遺物

現在遺物は高井舟着神社（更科）に宝蔵され、文学博士小野勝年先生の由緒書がある。発見の事情や、性格について述べておられるので左にそれを掲載させていただき参考としたい。

姥懐山古墳遺物由緒書　　奈良博物館　小野勝年

此処に宝蔵する上代の遺物は昭和二二年一〇月二日本村檀原長則君によつて発見されたものである。場所は日野村と中野町との境界に近い姥懐山の突端なる丘陵上である。

発見の由来を訪ねるに丘頂部の檜の根元に鉄片が露出していたので土を除くとそれが並列する三振の鉄剣の一部分であり、而もその下には鏡鑑一面が裏面（文様部分）を上に向けて置かれ、附近には一個の管玉があつたという。それ以外には別に発見品とては無かつたが出土品の内容から考えて或はその場所から推して、これが墳墓築造の際、副葬品として埋蔵されたものであることは疑うべくもない。



第7図　姥懐山古墳土遺物（1：3）

鉄劍は何れも腐蝕のため完形をとどめていないが長さ約二三センチ余、巾三センチの一振が比較的原形に近いと解され、これと他の一振は断面菱形を示し劍たることが明らかである。

鏡鑑は径一一、二センチ稍々薄手で鋳上りは佳良である。四圏の文様帯中外側二圏は鋸歯文をめぐらし、第三圏は櫛目文をなし内圏は劍をめぐつて四本宛の粗縄文と四個の乳とを配している。蓋し漢式神獸鏡より便化せるものであつて、その金属質及び文様から本邦に於ける仿製品であることが認められる。而もこれと同一鋳型と思われる遺品が既に美濃加茂郡坂祝村から出土している。（平凡社美術全集五）

管玉は径二センチ長さ二センチ軟玉製品である。これが単一であつたが勾玉等と共に胸飾の一部として用いられ後者が散在したものであるか明確でないが淡緑色のもので管玉としては古式であるからこれらの遺物は封土が自然に剝削された結果発見され、後世人為的攪乱の跡は認められない。

埋葬当時の状態に就いて見るならば地上の上部を削つてその基部直径約一七メートルの円墳をつくり、その上部に比較的浅く石を用いず粘土―その残在から推して―槨室を作つたが、或は木蓆などの可朽物を用いて葬つたであろう。何れにせよ、その内容から古墳築造の古式に属するものと推測される。従つて地理的環境から近畿地方に於ける同式の古墳築造年代より稍々おくれるとしても高井地方に於ける最古式の一であることは申すまでもない。

姥懐山は本村金鎧山古墳とはるかに相対する景勝の位置を占め、遠く西方中野盆地を隔て長丘村七瀬双子塚を望むことができる。

その様式上金鎧山古墳より古く外形を異にするも埋葬法は双子塚古墳とは稍々共通したところがあり遺物の内容は更に旧い。若し人あつて強いて築造実年代を求めんとするならば今を去る一五、六〇〇年の昔と答うべきであろう。

按ずるにこの古墳に於ける遺物は豊富とは申し得ない。然し鏡と劍と玉とよりなる点に於て単に上代貴族の最も貴重視せるもの

というにとどまらず、我が歴史皇位の表徴とも通ずるものがあり、これによつて一段の感慨をおぼへしむる。

昭和二三年一一月　（金井汲次）

四　更科裏の山遺跡緊急発掘調査

㈠　分布調査

姥懐住宅団地造形計画は着々と進み、新しく一二〇戸建設予定地は埋蔵文化財の包含地域であるため緊急分布調査を実施した。調査の次第は次のとおりである。

昭和四三年一〇月一三日（日）曇後晴　朝九時に調査員、作業員は現地に集合し、丘陵上の表面採集を行う。黒耀石片四点、石鏃片一点、土師器片一〇余点を得た。土師器片には糸切底片や、非常に粗大な刷目文の甕片があつた。

第一試掘穴を長さ三メートル、巾一メートルのものを九六七番地へ設定し、二〇余センチ掘りくぼめたが遺物は何物も検出することができなかつた。その西隣九六六番地へ第二号（三×二メートル）を設定したが何物も得られなかつた。

午後は丘陵南斜面の表採を行い土師器片多量を採集したがいずれも細片であつた。裏の山三三五番地イ号へ、長さ三メートル、巾一メートルの第三、四号を設けた。第三号は黒色の表土が六〇センチ、それ以下は黒褐色の粘土質層であつた。遺物は二五～四〇センチに多く、打石斧は表土下三〇センチ、黒耀石製無柄石鏃は表土下三五センチから発掘された。土器は土師器片、縄文土器片であつた。が文様は磨滅していた。土師器片も細片二〇余点を得たが器形を知ることができないものばかりであつた。打石斧（第12図5）は硬砂岩で肥厚した粗野なつくりである。先土器期の頁岩製（第12図4）はナイフ型石器である。

第四号は約三〇センチ掘りくぼめたが遺物は何等得ることができなかつた。ここは褐色の表土三〇センチにつづいて黄褐色の粘質土であつた。

以上の調査と、すぐ南隣三三四番地イ号は、かつて北信学生考古学研究会の調査によつて貴重な資料が検出されたことから、緊急発掘調査の必要があると認めたわけである。　（金井汲次）

㈡　遺跡の立地

前述のごとき分布調査の実施によつて、緊急発掘調査を行うことにした。

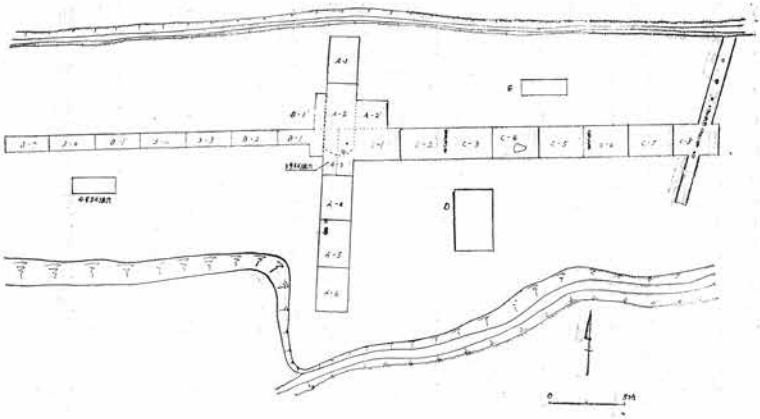
遺跡の所在する裏の山三三五番地イ号は南へ緩傾斜し、極めて日受けのよい場所である。標高はおよそ三九三～三九六メートルで現況は普通畑である。住宅団地造成のため当市が、地主藤田早苗氏から買収したものであるが、以前は苹果園で一〇年前後のものが栽植されていた。調査時は、以前の苹果は伐採されて、後作に大部分にトマトを、僅少部に蔬菜類が栽培してあつた。

水は当遺跡の南方約八〇メートルの所を小さな川が東から西へ流下している。これは更科峠周辺の山地から流れ出る水を集めたもので、量はさして多くはないが年間を通じて水は求めることができる。　（金井汲次）

㈢　調査経過

一一月一日（金）晴　午後一時作業開始。

明日からの発掘調査に備えて、分布調査の際設定した三号試掘穴に



第8図　トレンチ図

並行してほぼ南北にAトレンチ（二×一八メートル）を設定した。更にAトレンチにほぼ直角に、東西にBトレンチ（一×二一メートル）を設定し、各トレンチを3メートル間隔にポイントを打つた。

一一月二日（土）快晴

午前九時作業開始。

市役所から発掘用器材が届き、現場へ運搬する。午前中、調査員五名でAトレンチ3区から調査をすすめ、Aの2、4、5区に及ぶ。

2、3区表土下約二〇センチから土師器破片の出土をみた。午後、南宮中学校生徒18名の来援があり、Bトレンチ1～7区にわたり表土をはぐ。Bの1～5区まで約二〇センチを掘り下げて中止した。遺物はBの1区が多くついで2～4区の順となり土師器片若干である。B－4区からは、石鏃1点を検出した。

一一月三日（日）晴　午前九時作業開始。

八名の調査員を中心としてAトレンチを飯山北高生徒Bトレンチを南宮中学校生徒、Cトレンチを高社中学校生徒が担当した。

Cトレンチ1～7区にかけて、表土下約二〇センチより東西にまつすぐ走る溝（巾約一五～二〇ゼンチ）が検出された。更に、C－2区とC－3区の中間、C－6区西側、C－8区中央の3ケ所より南北に走る石列を検出した。Aトレンチ A－3区からは、石皿と磨石を検出した。本日は出土遺物が多く、Aトレンチにおいては、A－1区より鉄鏃一点石鏃一点、土師片若干A－2区より縄文土器片数点、石鏃一点、土師器片多数A－3区（中央部）より縄文土器片数一〇片、土師器片多数が出土している。又A－1区～4区にかけて黒耀石片が多数散在していた。Bトレンチにおいては、B－1区B－2区よりそれぞれ石鏃二点ずつ、土師器片多数が出土しているB－4区からも石鏃一点が出土した。

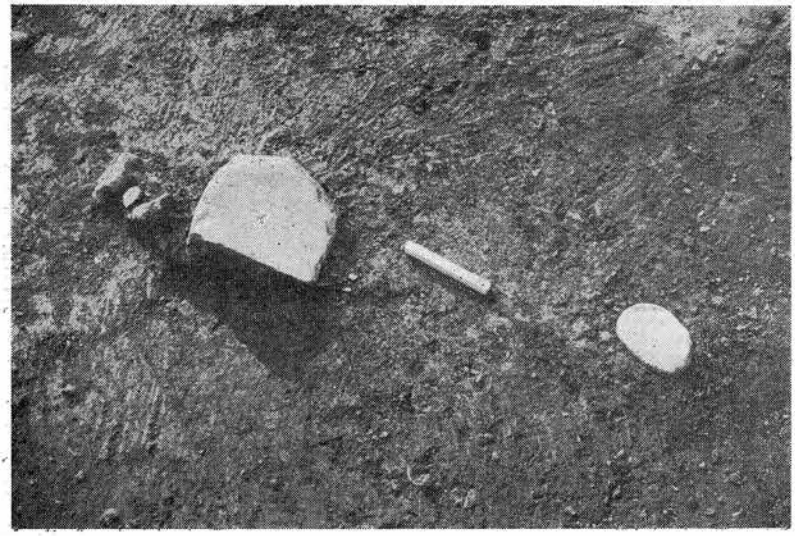
Cトレンチにおいては、C－1区からC－5区にかけて土師器片若干が検出され、C－2区からは土師器の高坏一点、縄文土器片数点が出土している。又、C－1区、C－3区、C－4区、C－7区から一点ずつ石鏃が出土している。更に、C－3区より凹石一点、C－4区より打製石斧が出土した。

一一月四日（月）快晴　午前九時作業開始。

Aトレンチ A－1区～A－3区を調査する。A－3において、石皿、磨石を中心として落ち込みが検出され、縄文土器片数点、石鏃

一点が出土した。

一一月五日（火）晴　午前九時作業開始。



第9図　石皿、磨石出状況

昨日に引き続きA－3区の精査併行してC－1区B－1区の調査を行なう。

A3区の石皿、磨石を中心とした落ち込みにおいて、C－1区北側は、リンゴの木栽植の為付近が攪乱しておるとともに、B－1区においても南北に走る溝があつた為にこの落ち込みの性格を確認することは出来なかつた。落ち込み内からは、縄文土器片数点出土した。A－5区においては、大小二つのピット（P1径約二〇センチP2径約四〇センチ）が検出されP1からは黒耀石片一点、P2からは、土師器片数が出土した。

一一月六日（水）曇時々小雨　天候不順の為に本日の作業ははかどらなかつた。A－3区における落ち込みの性格確認の為にA－2区の東側に二×二メートルグリット（A－2′）、西側に二、二×〇、八メートルグリット（B－1′）を設定し調査を進めた。A－2′区からは、土師片若干、須恵器片二点、石鏃一点が出土したが、落ち込みの確認は出来なかつた。

一一月七日（木）晴　午前九時作業開始。

A－2′区およびB－1′区の精査を終えた後、測量に移つた。全体測量（縮尺一〇〇分の一）およびAトレンチ西壁面、Bトレンチ北壁面、Cトレンチ北壁面のセクションをとつた。

一一月九日（土）曇　午後一時作業開始。

Cトレンチ C－4区、C－5区、C－6区の調査を進めた。C－4区において長さ六〇センチ最大幅二三センチを計る自然石（安山岩）が出土した。そして、石の北側周辺より黒耀石片三三点が出土している。出土遺物は他に土師器片数点である。

一一月一〇日（日）晴　午前九時作業開始。

C－3区南にDトレンチ（四×二、五メートル）、C－4区、－C5区北側にEトレンチ（三×一メートル）を設定し調査を行なつた。併行してC－8区出土の列石の確認を行なつた。Dトレンチにおいては、巨大の自然石が数個点在し、土師器片若干出土したのみである。Eトレンチにおいても、土師器片若干が出土したのみである。C－8区の列石は南北に約七メートルにわたつて存在していたがおそらく排水の施設であるものと思われる。夕方調査を完了した。

㈣ 遺構

分布調査の折に設けた試掘穴第三号を起点に三つトレンチを入れ、その他小さなものを二つ設定した。

A－3を中心に、A－2、B－1、C－1に遺構らしいものが僅かに認め、付近の拡張を行つた。特にA－3に石皿と磨石が表土下四〇センチのところにセットして検出され、周辺には落ちこみやピット、壁を思わせるものも見られたが、ついに明確にすることはできなかつた。

時代の降る溝状遺構や列石等もあつたが詳細は前述の日誌を参照されたい。

（金井正彦）

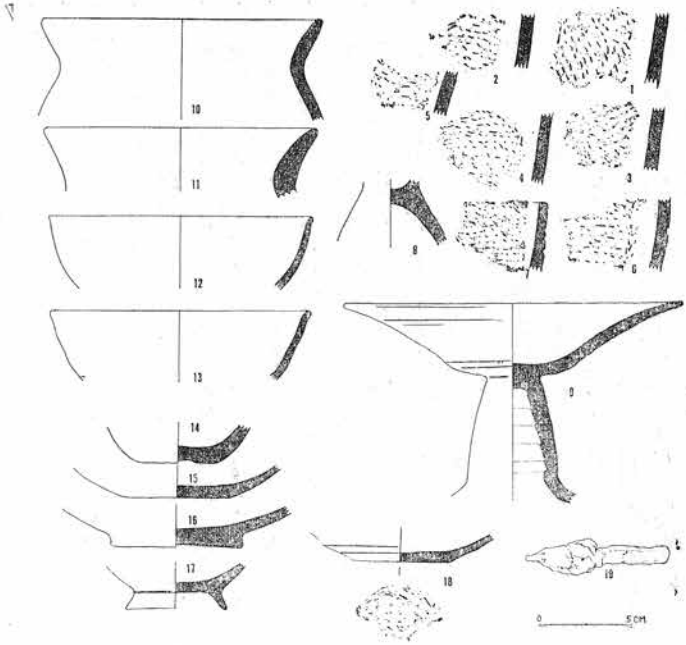
㈤ 遺物

今回の発掘調査によつて得た遺物は、縄文土器片約八〇点、ほぼ完形の土師器の高坏一点、土師器片約一六〇〇点須恵器片二点と、石鏃一三点 磨石二点、凹石二点、石鏃一点、石斧一点そして鉄鏃一点とであつた。

一、土 器

(1) 縄文式土器（第一〇図1～7）

1は胎土、焼成ともに良好で褐色を呈し斜行縄文をもつ2は胎土、焼成とも良好で茶褐色を呈し斜行縄文の上に連続刺突文をもつ前期（南大原式）に比定される。3は胎土焼成ともに良好であり暗褐色を呈し斜行縄文の上に連続刺突文をもつ前期（南大原式）に比定さ



第10図 土器・鉄鏃（1：4）

れる。4は胎土焼成とも粗悪であり灰褐色を呈し胎土中には雲母を多く含んでいる。平行沈線が施されている。5は、胎土焼成とも粗悪であり灰褐色を呈し、粒砂を含んでいる。6は、胎土焼成とも良好であり、褐色を呈し、連続刺突文をもつ、7は、口縁部破片で胎土、焼成ともに良好で赤褐色を呈し、粒砂を含んでいる太い平行沈線を施している。

(2) 土師器（第一〇図—8～18）

高坏形土器（8、9）

8、9ともに胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈する。9は和泉期に比定されるもので、組みあわせ成形手法により、脚部には絞り痕、坏部には、ゆるやかな稜線を持っている。

甕形土器（10、11、14、16）

10は口縁部破片で胎土、焼成ともに良好で、赤褐色を呈し胎土中に粒砂を含んでいる。11は、口縁部破片で胎土、焼成とも普通で褐色を呈する。14、16は、底部破片で胎土、焼成とも普通で褐色を呈する。

椀形土器（12、13）

12は、胎土、焼成とも普通で灰褐色を呈し胎土に粒砂を含んでいる。13は、胎土、焼成とも普通で褐色を呈し、粒砂を含んでいる。

坏形土器（15、17、18）

15は、胎土、焼成とも普通で褐色を呈し、内面は黒色に研磨されている。

17は、高台付で胎土、焼成とも普通で褐色を呈し、内面は黒色に研磨されている。

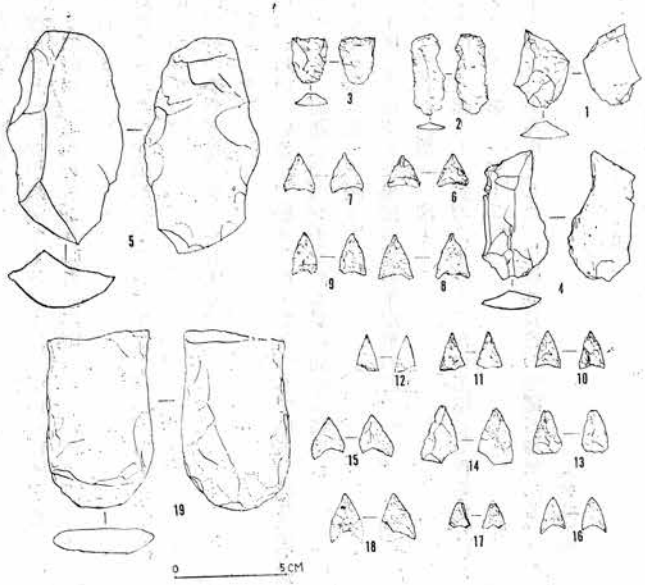
18は、糸切底をもつもので胎土、焼成とも良好で茶褐色を呈する。

2、鉄器（鉄鏃）（第10図19）

A—1区より出土したもので、銹と腐蝕がはげしいために、形がはつきりしないが、有茎三角形式であろう。

3、石　器

石鏃（第一一図—16～18）



第11図　石　器

石器類のうち石器の占める量は多く13点を数える。黒耀石製が大半で硅石のものが2点である。総て無柄の石器で6、7、8、10、13、15、16は完形である。14はやや粗製である。

打製石斧（19）

一点のみ検出された。頭部を欠いているが短冊型と楔型の中間形態を示す。硬砂岩である。

磨石（第一二図1・2）

2点検出されたが安山岩製である。1は一稜のみ粗磨されているが、2は断面にみられるように各稜が磨滅している。

凹石（3・4）

2点検出されたが安山岩製である。3は、同心円的な孔が表に一つ裏に二つ有する。

4は、表に不整形な孔を一つ有する。

石皿（5）

安山岩を用いているが、約4分の1を欠失している。現存部で長径二一センチ、短径二〇センチを測るが片面のみ利用している。

不定型石器（第一一図3）

B—1区より出土した黒耀石製の不定形石器である。

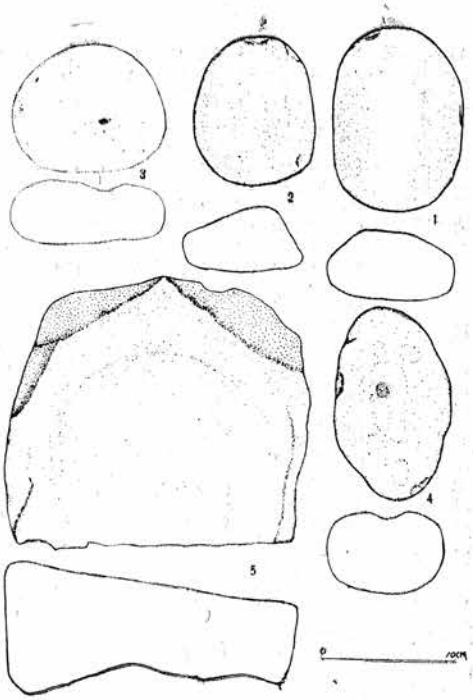
ナイフ型石器（第一一図—1）

A—3区より出土し、質のあまりよくない黒耀石で作られている。

ブレイド（第一一図—2）

A—3拡張区から出土した。比較的良質の黒耀石製である。

（金井正彦）



第12図　石器（1…5）

五　遺跡周辺の遺物について

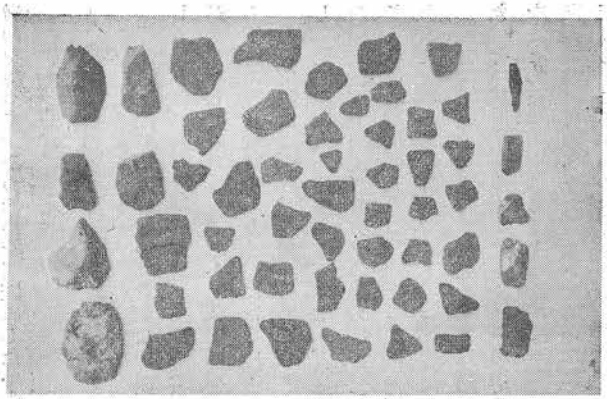
ここで述べる遺物は「信濃考古綜覧」に更科伊勢山下遺跡と記載されている場所のものである。当遺跡より今日まで、発見、発掘されたものと、昭和二四年三月に北信学生考古学研究会員の手によって試掘された時のものである。遺跡は大字更科字裏の山三三四のイロ

番地で、約三平方メートルの試掘であつた。径二〇～三〇センチの礫群が多く散在するなかに土器片や石器等が発見されたが、住居址の確認はできなかつた。

次に土器類と石器に分けて報告したい。

(一) 土器

(イ)押形文土器　ただ一片発見したのみで表面の磨滅がはげしく、性格の確認しがたい小片である。(ロ)条線文土器　当遺跡の特長を裏付ける土器片で、縦横或いは斜に櫛目模様の沈線文をあらわしているが不規則な文様となつている。また、貝殻の背で擦つた様な文様のものも含まれている。(ハ)撚糸文土器　これも一、二点の発見にとどまる。(ニ)舟形文土器　瓜を背にして施した様な模様が(イ)と組み合わせて施してある。(ホ)その他の土器　細い棒状工具で突いた模様、また、土器面に紐帯を施して突きさした模様などがある。(ヘ)素文土器　前記の文様を有する土器片の外、多数の素文の土器片が発見されている。



第13図　遺物

以上の土器片の大部分は繊維を含みもろい感じのものである。

(二) 石器

(イ)半磨製石斧　一一五六のイ番地（地主藤田早苗氏）の畑地から、当時東京から疎開していた笠井継程君によつて発見された長さ一〇センチ余の局部磨製の逸品である。(ロ)磨石斧　小型と大型のものが一個ずつ表採されているが両者とも白色の石を用い、石刃で瓜形石器といつた形態をしている。(ハ)石鏃　鋭く尖つた三角形から底部に深く抉り込みのあるもの、等辺三角形のものなどが主体である。数例の有柄石器は他から混入したものと考えられる。(ニ)打石器　割合に小型品はかりで、大型のものは拾集されていない。よく使用されたらしく磨滅しがものが多い。(ホ)石器　完形品は無いが三個発見されている。楕円形のもので砥石として使用された痕のあるものも見受ける。(ヘ)磨石　これも多数発見されているが角に当る部分に敲いた跡の有するものが多い。(ト)凹石　二～三個所に小さな穴のある通有品と一個所に穴のあるものも発見されている。(チ)その他の石製品　石錐、石刃等蒐集されている。

以上のうち石器、凹石は安山岩、石器、石製品は粘板岩が多く、硅石、黒耀石が次いでいる。

当遺跡出土品の概要を述べてきたが当地方の縄文早期遺跡の発掘調査例は無く、その性格の把握は困難を感じる。有尾式や次の南大原式とも、私の実見では肌あいが違つているように思われる。土器類は出土例が僅少のため考察は困難であるが、しいて言いば、縄文早期末から前期初頭にかけての遺跡ではあるまいか。今後の資料の

増加を待つて、その性格を明瞭にしたいものである。（檀原長則）

六　結　び

姥懐遺跡は当地方にとつて貴重な埋蔵文化財を宝蔵している所として大事にされ、故神田五六、小野勝平、永峯光一、林茂樹先生等が視察をしておられる。しかし住宅団地造成や農免道路の開設等から遺跡の現状変更をしなくてはならぬ事情にたちいたつた。

そこで数次に亘り、予備、分布調査を行い、緊急発掘調査を実施し、延二二四人（姥懐遺跡　六七人、姥懐山古墳　二六人、更科裏の山遺跡一三一人）の方々の協力によつて精査することができた。こゝに物心両面に亘りご協力とご配慮をいただいた方々に対し心からお礼を申しあげたい。

緊急発掘調査によつて前述のような幾多の資料を得ることができ、その都度孔版印刷によつて略報が出されていた。今回は、それをまとめたものである。したがつて一貫性を欠く面が多々あるが、記録保存に努めて来た点をお認めいただき、何かの参考にしていただけるところがあつたとすれば、この仕事にたずさわつた者にとつては望外の幸である。

しかし記録保存には力を致したものの検出された遺構や遺物は予想外に少なかつた。それは地質の項にも述べてある如く、極めてもろい地盤にあたり、豪雨や豪雪のあつた時は地すべりや洪水が幾回も繰かえされて地層の変化が著るしかつたためである。流されたもの、推積されたもの、攪乱されたものが多くすでに文中でも述べたごとく、先土器期、縄文期、土師期の遺物がミックスして出土している。そこで住居址、墓域等の遺構の確認されたものは積石墓址の一例のみであつた。この積石墓址の場合も平地に少し穴を掘りくぼめて納骨し、弔いのために石積みをしたもののごとくであるが、埋葬後に山津波か何かの事情で山手から土砂が流されて埋没したように観取される。

姥懐山古墳の分布調査は農免道路の土取場に予定されたために実施した。考古学、地質学の立場から三日間に亘つて調査をし、墳丘築造の跡を見ぬため、祭祀遺跡ではあるまいかとしたのである。われわれが分布調査を実施してから間もなく、施工の一部変更があつて、姥懐山古墳は現状を変更しないということになつた。これはわれわれにとつては最も有難いことであり、学界としても幸いなことであつた。

本報告書は調査委員が分担執筆したもので急ぐのあまり不備の点ばかりであるが諸賢のご教示を賜わりたい。（金井汲次）

後記

この報告書は東山住宅団地造成に関連して行われた昭和四一年八月上旬から昭和四十三年末日までにわたる間の姥懐遺跡、姥懐山古墳、更科裏之山遺跡の分布調査、緊急発掘調査を主内容とした報告である。

関係各方面、各位の絶大なるご尽力、ご協力をいただいて調査が無事終り、報告書上梓のはこびとなったことは、喜びにたえない。

尚今後更に調査を重ね資料を分析、検討することによつて遺漏なきを期したい。

現地に立つて見てその名のとおり姥の懐に抱かれたような、なだらかな南面の地形に古代人が心をひかれたことがよくうなずける。

又、眺めも素晴しく中野扇状地の西には北信五岳を仰ぎ、善光寺平の向こうにははるかにアルプスの峯々を望むことができる。

これ等の遺跡地はやがて三百余戸の新しい住宅団地として現代に活用されることになつている。

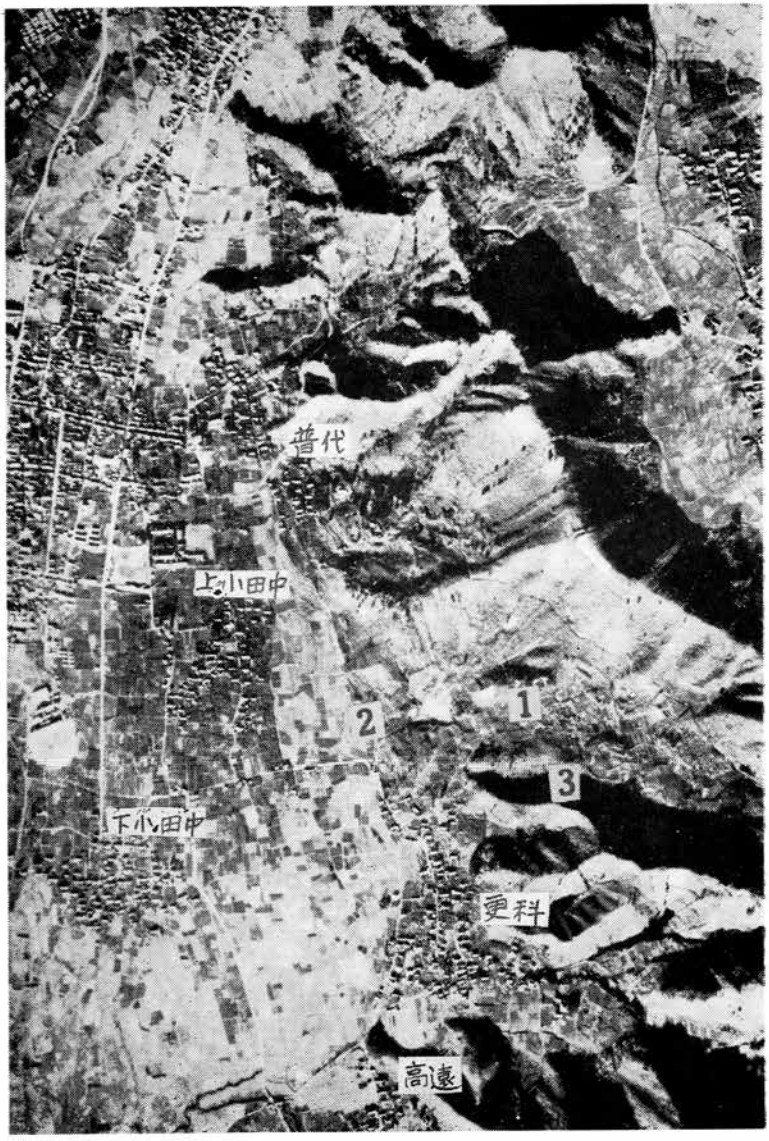
この調査にあたつて、学業の間、特にご尽力いただいた学生、生徒、児童の方々を次に列記して心からなる感謝を捧げたい。

昭和四十四年二月一日　中野市教育次長　小林曦暉

記

（敬称略）

立正大学生　秋山宏和　飯山北高生　中島庄一　高橋　均　大原正義　金井正三　水沢克己　須坂高校生　金井文司　高社中学生　山崎光男　三沢一良　山田正二郎　小林清一　山口洋一　塚田博義　高橋義昭　高橋通博　藤沢孝充　清水孝美　若林庄二　小林住雄　佐藤信之　山岸広士　竹内英夫　淀　直文　豊田吉隆　佐藤和義　三井源夫　市川一男　須藤良比古　島田徳夫　土屋　勝　山崎正男　土屋治幸　山田正文　田尻　修　中島宣明　土屋直良　栗林一成　山田江市　江本忠雄　南宮中学生　児島哲男　山本清文　武田雅文　斉藤文一　阿部善春　児玉忠士　田川　昇　丸山政弘　竹内常雄　関取紀男　小林正治　内堀　隆　小林公治　小林秀人　両角重雄　中村幸典　中村明文　井上政道　滝沢文雄　小林賢次　日野小児童　小根沢充　滝沢三男　小沢寿郎　小林宏子　鈴木徳子　田川博和　森山益雄

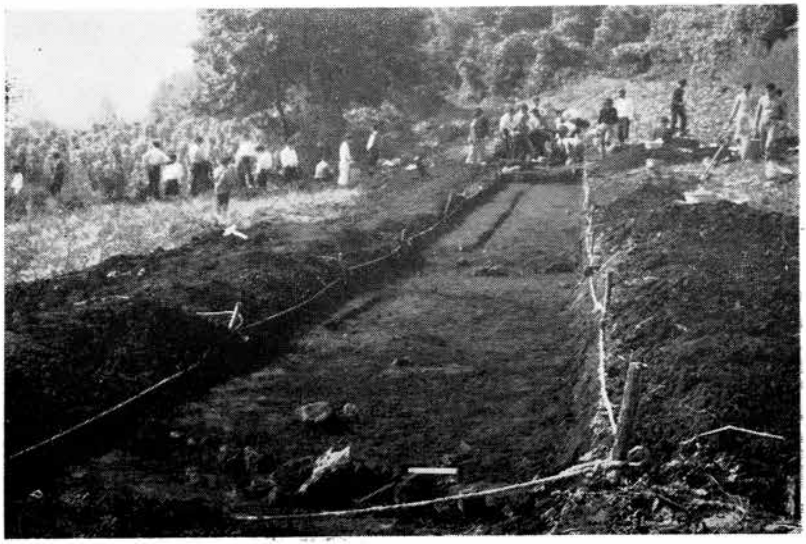


別図版 第1

遺跡付近航空写真

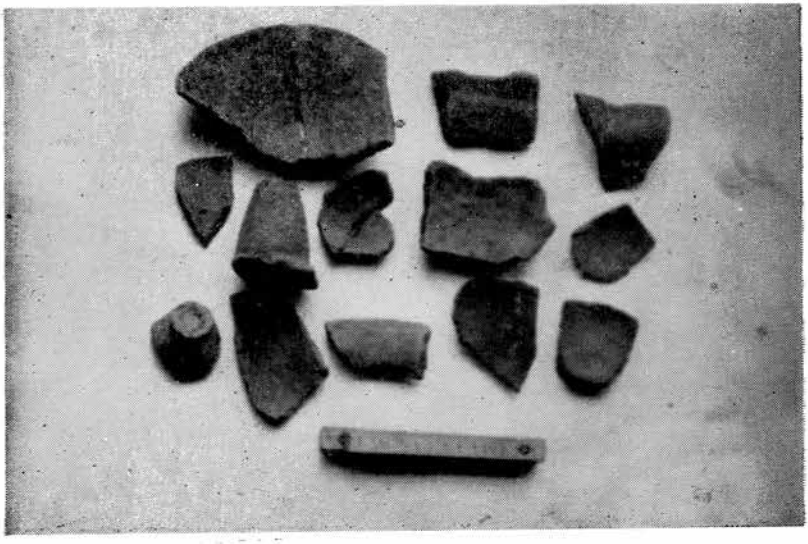
別図版 第2
発掘状況（姥懐遺跡）

別図版 第3
石組遺構（姥懐遺跡）



別図版 第4
発掘状況 （更科裏の山遺跡）

別図版 第5
台 石 （更科裏の山C－4）



別図版 第6
土師器 （更科裏の山遺跡）

別図版 第7
石器 （更科裏の山遺跡）